

大地から小さな学校のおたより

ブラジル第3アリアンサ富山県日本語学校便り
NO9 4月号

4月に入り、半ば頃を過ぎると、朝晩がとても寒く感じるようになってきました。日本語学校に通っている子どもたちの中には、風邪をひいてしまった子もいました。この頃になると、「パイネーラ」という花が咲きます。色がピンク色なので、アリアンサの人たちは、「先生これは桜みたいでしょ」と言っていました。桜よりも色鮮やかで、緑の大地には一際目立って見えます。このコントラストを見ると、ブラジルならではの風景だと思います。



新年度が始まりました。



4月に入り新年度がスタートです。新しく5歳の子どもたちが2人入ってきました。初日、少し緊張気味だった子どもたちも、たった1日で慣れてしまったようです。1週間後の2回目には教室に入るなり、「こんにちは」と大きな声で登校してきました。10人になってしまった日本語学校がこの2人のおかげで12人となり、少し活気が戻ってきたようです。私も少し嬉しくなっていました。

ノロエステ地区日本語教育研修会がありました。

この地区での研修会は、なんと6年ぶりに行われたそうです。サンパウロ大学松原礼子準教授の日本語教育教授法講義やワークショップ、各学校の実践発表などが行われました。私は「授業で使える教師が作る工作教材」と題して、美術教師には日本語教育にどのような役割があるのかを実践例を元に発表しました。

私は、以前学校便りで紹介した「ていませ」を教えるための教材「ペンギンてっさん」、そして「何の、誰の、どこの」を教えるための「いろいろな本シリーズ」を制作し発表しました。この教材には、野菜、果物、飲み物、食べ物、からだ、に関する情報が絵だけで分類されており、それぞれ本、絵本、雑誌と書かれています。もちろんそれぞれの名称について学習できますが、このように分類本にすると「これは何の本ですか」「これは野菜の本です」と言う問答ができます。そしてこれらの本の裏には、名前が書かれています。たろう、ナンシー、ロベルト、リーなどと書かれているため「誰の本ですか」「たろうさんの本です」という問答ができます。さらに「どこの方ですか」「日本の方です」という問答ができます。中には名前が書かれていない本もあります。「誰の本ですか」「わかりません」という表現もできるようになっています。

なぜこの教材を作ったかという、「の」のためです。ここ第3アリアンサの子どもたちは、「これは誰のですか？」と聞くと「たろう」または「僕」としか答えられません。つまり「誰」という言葉を理解しているだけで、「誰の」という所有を表していることが理解できていなかったのです。そのためにこの教材を作ってみました。この教材を使ったせいか、今では「の」を聞くと必ず「～の」をつけて話をするできるようになってきました。助詞の「の」は外国人にとって聞き取りにくい言葉の一つなのかも知れませんね。



ノロエステ第3地区、陸上競技大会が行われました。



毎年、この時期になると、陸上競技大会が行われます。ここで、よい成績を取った子どもたちは、州大会に出場します。第3アリアンサからも、何人か出場することになったそうです。

「先生も参加しなよ」と言われましたが、「お断りします」と率直に断ってしまいました。15年も運動をしていない私には酷な行事です。普段からもっと体作りをしていればよかったです。運動嫌いな私には縁遠い話です。

子どもたちは、この競い合いが好きなようで、みんな真剣に取り組んでいました。

教師会も始まりました。



アリアンサを含む、ノロエステ第3地区教師会会議も新年度スタートです。各学校の先生、保護者会長が集まり、今年度行事の確認をしました。今年も「お話発表会」「体育祭」「林間学校」などたくさんの行事があります。体育祭に関しては30周年の記念行事になります。計画をしっかりと立てて、頑張っていこうと思います。

会議の場所は、今年はミランドポリス高岡日本語学校で行われます。毎年持ち回りで、会議の場所や議長の役割が回ってきます。

説明は無理やり、でも何回も行うことが大事なようです。

皆さんは、中学、高校と英語を勉強してきたと思うのですが、英語を話すことができますか。きっと「できない」と答える人が多いかと思えます。ここブラジルの3世4世の日系人も、日本語を上手に話す人は極まれです。4世の子どもたちに関しては、全く話すことができません。

しかし、私が言うのもなんですが、第3アリアンサの子どもたちは変わってきました。昨年8月に比べると、日本語での会話がとて多くなってきたのです。

私は、ポルトガル語を一切使用していません。その代り、この写真のように絵で教えます。「せんせいわかりません」と言われた時にはすべて絵と日本語で説明します。今のところ、「その説明わかりません」と言われたことがなく、子供たちはこれで納得できているようです。(おそらく)



このやり方は、実は私がタイにいた時に体得した方法です。タイ語が分からない私は、大学生らに、つたない英語を使用しながら、絵で説明し無理やり納得させる方法で、美術を教えていました。実はこの「無理やり」と言う方法は、意外と言語習得には役に立つのだと実感しています。絵で説明しても分からない場合があります。でもこれは最初のうちだけで、何度も何度も行うことで、それが言語として通用するようになってくるのです。つまり子どもたちが先生のコミュニケーション方法を自然と習得してしまい、自ら想像して、学習に取り組まないといけな環境ができるようです。そのため学習プリントを見ても、自分で想像し考えたことを記入するようになってきており、さらには目の前にいる先生にポルトガル語を使っても自分の言いたいことが伝わらないため、自分から日本語を使うようになってきたのです。

その他、私の授業では、「目、耳、口、手、体全体」この5つの部位を使うように心がけています。そして、授業では必ず1回は笑うことができるようにも心がけています。その内容に関してはまた紹介していきたいと思えます。